

## 《工事現場・アーカイブス》6

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた相馬港を震災6年目の早春に訪問  
～港には力強い再建への槌音がみなぎっていた～

地震と津波によって港湾施設はほぼ全面的に被害を受けた

今回の《工事現場・アーカイブス》は福島県相馬市だ。2017年1月に訪ねたその現場は、福島県では小名浜漁港（いわき市）に次ぎ、全国でも有数の漁港として知られる松川浦漁港や、工業港を含む相馬港である。

相馬市および相馬港は、2011年3月11日に発生した東日本大震災で大きな被害を受けた。2017年1月に訪ねた現場は、その復興事業の現場だった。

震災から丸6年を迎えようとしていた相馬市の市域には、まだ生々しい傷跡が残っていた。

市民の生活再建に不可欠な住宅建設などは順調に進んでいたが、相馬市の基幹産業である漁業は、まだ再開の見通しが立っていない状態だった。

海水の放射能汚染についての調査がまだ続いていたため、当時は福島県沖で獲れる44種の魚介類の流通および漁獲のための操業が全面的に禁じられていた。取材時の段階では、それらの解禁に向けた試験操業が細々と行われていたが、試験操業で獲られた魚介のう

ち、タコやツブ貝など数種の魚介のみ、県内に限り流通が許されていたというのが現状だった（今年4月には制限が解禁された）。

そのため震災で被害を受けた漁港設備はすでに復興がなっていたが、開店休業状態におかれていた。稼働しているのは試験操業で水揚げされた魚介の線量検査などを行う部門だけ。真新しい施設の並ぶ松川浦漁港は、うらかな陽光の下、静かにたたずんでいた。

一転して、工業港としての相馬港の復興に向けた槌音は活発だった。相馬市北部に隣接する新地町と共同で進めていたエネルギー、物流拠点としての機能整備（LNG基地化など）が、とりわけ活発に推進されていた。港の片隅に建立されたばかりの、御影石の震災慰霊碑が見守るなか、港湾施設がそこそこで強化、再建されていく様子には、震災からもうすぐ7年目に入るといふ「歳月」の経過が着実に投影されていることを感じさせた。

震災から丸10年の来年には、また取材に訪れたい。（二ハチ）